

改めてSDGsについて考える

SDGs(エスディーゼズ)ということばを耳にしたり、カラフルな色使いの17の目標を目にする機会が多くなりました。とはいえ、国連が定めた目標を達成するために国や企業が取り組むことで、身近なことに思えない、何か自分のできることをしたいと思っても、どう取り組めばいいのかわからないという人も少なくないかもしれません。

そこで、改めてSDGsについて取り上げて、私たちが日々の暮らしの中でどんなことができるかについて考えてみることにしました。



琵琶湖版SDGs

『MLGs(マザーレイクゴールズ)』

環境問題や気候変動、貧困や紛争など、今、世界は多くの課題に直面しています。将来にわたって、世界中の人々がこの地球に暮らし続けていくために、2030年までにみんなで行った課題解決に取り組んでいこうと、国連が定めた『持続可能な開発目標』がSDGsです。2015年の国連サミットで、すべての加盟国が合意した『持続可能な開発のための2030アジェンダ』の中で掲げられました。

日本では2016年に内閣総理大臣を本部長とする『SDGs推進本部』を設置し、全省庁による具体的な施策を盛り込んだ『SDGsアクションプラン』を毎年策定して、政府を中心に企業や自治体、各種団体、個人が取り組みを進めています。

2023年現在、日本のSDGs達成度ラッキンクは166カ国中21位。上位を占めるのはスウェーデンなどの北欧諸国です。順調に取り組みが進んでいる「ゴールもある反面、『ジェンダー平等』『気候変動対策』『海の豊かさ』『陸の豊かさ』など達成度が低いゴールもあるため、2030年に向けて企業や団体だけでなく、地域、家庭、個人の取り組みを一層強化していく必要があります。とはいえ、世界的な目標に、私たちの日々の暮らしの中でできることがどう結びつくのか、なかなかイメージしにくいのではないのでしょうか。

『MLGs(マザーレイクゴールズ)』は、SDGsの達成に向けた滋賀県ならではの取り組みで、琵琶湖版SDGsとして2021年に誕生しました。「琵琶湖を通じてSDG

sをアクションまで落とし込む」「琵琶湖を通して自分たちの活動がSDGsにつながっていることを発見する」ための仕組みでもあるMLGsがわかれば、SDGsはもっと身近なものになるかもしれません。

琵琶湖のためにできることが13のゴールに

MLGsの13のゴールは、琵琶湖に関わる多様な人たちが集まって、毎年開催してきたマザーレイクフォーラムびわこ3会議で、10年間蓄積してきた琵琶湖のために自分たちができること「びわ湖との約束」をもとに、行政だけでなく、NPOや企業、研究者など多様な皆さんから成る「マザーレイクゴールズ推進委員会」によって定められました。

例えばGoal1「清らかさを感じる水」には、1977年に琵琶湖で赤潮が発生した時、「石けん運動」が市民から主体的に起こったように、昔から琵琶湖を大切にしてきた琵琶湖への想いが受け継がれています。

また、災害が起きても被害をできるだけ小さくする暮らしへの転換を目指すGoal8「気候変動や自然災害に強い暮らし」や、地域の経済循環が活性化することで、環境も持続的に守っていくことになるGoal9「生業・産業に地域の資源を活かそう」など、琵琶湖が暮らしや産業と深く結びついていることを示しています。

さらに、Goal11「びわ湖を楽しみ愛する人を増やそう」のように、琵琶湖に親しみを感じて好きになる人をもっと増やすことも目標になっています。

SDGsやMDGsと違って、環境保全や水質保全などの取り組みを思い浮かべますが、このように、自然環境だけでなく、産業



Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から

MLGsロゴマーク・キーコンセプト

琵琶湖を中央に配し、周囲には地球を模した円形の中に13のゴールカラーを配置したロゴマーク。円形は琵琶湖をとりまく湖国・滋賀、そして地球を表現しています。「琵琶湖は生活を写す鏡」「琵琶湖は地球の問題を映す」ことを表し、琵琶湖・滋賀から世界を変えるための目標であることを表しています。

変化のはじまりは「あなたと私」。あらゆる場所ですべての人が協力し、小さなことを積み上げ、共に変わっていくことが連鎖して、点が線に、線が面へと広がり、社会全体の変化につなげていきたい。そんな思いが込められています。

も、各分野の専門家が13のゴールについて、状態（現状）と傾向（以前に比べてどう変わりつつあるか）を評価するだけでなく、それぞれのゴールがどのように関連し合っているかを見て、総合的に評価を行っていくことを大切にしています。

年に一度、開催する『MLGs みんなのBIWAKO会議』では、さまざまな立場の人々が参加して、専門家が評価したゴールの達成状況を確認しあい、今後に向けて学びあう機会を設けています。

「環境保全や水質保全などの取り組みだけでなく、できることはほかにたくさんある」と三和さんが言うように、MLGsのウェブサイトに掲げられたアジェンダには、具体的なアクション例がゴールごとに提案されています。

さまざまな立場でできることから取り組む

では、実際にMLGsに取り組みたいと思ったら、どんなことから始めたらいいのでしょうか。

「環境保全や水質保全などの取り組みだけでなく、できることはほかにたくさんある」と三和さんが言うように、MLGsのウェブサイトに掲げられたアジェンダには、具体的なアクション例がゴールごとに提案されています。

また、学生ライターの記事などを参考に、自分ができること、やりたいことを考えたり、MLGsが実施するイベントやワークショップに参加することが、アクションを起こすきっかけになるかもしれません。「いべ



ントで楽しい体験をしたことが、琵琶湖や環境のことを考える根っことなり、MLGsの活動に主体的に参加してみようという一歩を踏み出せるのではないかと三和さん。

かねてから温暖化に危機感を持っていたという元モーグル日本代表の伊藤みきさんは、体操で代謝を上げ、体温を上げて暖房温度を下げようというコンセプトで、MLGsを身体で表現する

「MLGs体操」をプロデュース、自らMLGs広報大使となって普及に努めています。また、体操のバックに流れる「マザーレイク・ゴールズのうた」は、MLGsに賛同した



県職員の研修やさまざまなイベントで「MLGs体操」を紹介

「近江八幡児童合唱団スキップ」のみなさんが歌っています。

そのほかにも、ビワイチに挑戦してみよう、おいしい、その際、県外の友だちも誘って、『びわ湖を愛しみ愛する人を増やそう』の目標達成に貢献できるかもしれません。

三和さんは「企業や団体だけでなく、誰もがさまざまな立場で自分にできることに取り組んでいくことが、目標達成には欠かせない。自分の暮らしや仕事をもう一度見直して、少しでも琵琶湖を良くする方法があれば、ちょっとやり方を変えてみてほしい」と提言します。

そして、「目標達成のために解決すべき課題には複数の側面があり、さまざまな立場や意見があることに気づき、多様性を尊重しながらみんなで取り組み、全体としてより良くしていくことが大切になる」と語ります。それは、Goal 13が掲げるように、つながりあうことで『健全な循環』が生まれ、SDGsの目標達成にも大いに貢献できるということではないでしょうか。

滋賀県琵琶湖政策・MLGs推進担当理事の三和 伸彦さんは、「琵琶湖をめぐる問題はとても複雑で、水質が改善されたらすべてが良くなるといった単純な話ではありません。例えば、ある目標は達成に近づいたけれど、そのために別の目標達成に影響があるといったことも起こりうるし、環境や水質の問題がクリアされるだけでなく、経済活動もちゃんとまわっていかないといけない。そのためには『健全な循環』をキーワードに、全体のつながりを見て、環境も暮らしも経済活動もすべてがうまくまわる仕組みを考えていくことが大切になる」と説明します。

達成度をどのよう評価するかについて

SDGsをテーマにした私設公園『庄の本パーク』 休耕田にハスを植えて公園に

大津市真野にある『庄の本パーク』は、SDGsをテーマにした私設公園ですが、オーナーの井上昌宏さんによると、最初からSDGsを意識していたわけではなかったと。もともと田んぼがあった隣接地に太陽光発電施設ができたことから、雨が降った時に大量の雨水や土砂が流れ出して、下流にある農業用溜池に入り込まないようにと、所有していた休耕田を調整池にしたことが公園整備のきっかけになりました。

池にすると周囲をフェンスで囲まないといけないため、長浜市の『あいのたにコータスプロジェクト』を参考に、ハスを植えて栽培する耕作地にすることにしました。手に取れる距離で花を楽しめるようにして、地域の人たちが気軽に見に来られるようにしたい、さらにハス池を中心にキャンプや貸し農園など、訪れた人が楽しめる公園にしようという構想が広がりました。

また、井上さんが当初から考えていたのは、大きな災害が起これば、防災拠点として活用できるハスの中のキャンサイト



のは、大きな災害が起これば、防災拠点として活用できる

休耕田に隣接する里山



遊び場であり、災害時には支援拠点となる場所」という位置づけが明確になっていきました。

憩いの場+災害時に拠点になれる場所

最初は一人で整備を始めた井上さんですが、活動に興味を持った仲間が一人二人と増え、休耕田の奥にある小さな里山や竹やぶを整備し、テントサイトや貸し農園、砂場などを整備していく中で、「地域のみならずの憩いの場であり、大人の遊び場であり、災害時には支援拠点となる場所」という位置づけが明確になっていきました。



非常電源コンセント

そして、「ここでやっていることは、SDGsが掲げる目標達成に貢献できるのでは」ということに気づき、「SDGsの目標に対して何ができるかを考えていくと、17の目標すべてにここで取り組みを当てはめることができた」と井上さん。

庄の本パークのSDGs

- 01 貧困をなくそう ▶ 誰でも働ける方法を模索する
- 02 飢餓をゼロに ▶ 農地を農地のまま残す
- 03 すべての人に健康と福祉を ▶ ココロは美しいものを見ると喜びます
- 04 質の高い教育をみんなに ▶ 自分の手でものを作り出す工夫
- 05 ジェンダー平等を実現しよう ▶ 仲間意識の高揚
- 06 安全な水とトイレを世界中に ▶ 安全かどうか。水の成分を見る
- 07 エネルギーをみんなにそしてクリーンに ▶ 大規模災害時にアクセスできる電力の確保
- 08 働きがいも経済成長も ▶ ディーセント・ワークを推進する
- 09 産業と技術革新の基盤をつくろう ▶ イノベーションの試験管
- 10 人や国の不平等をなくそう ▶ 不平等を是正する
- 11 住み続けられるまちづくりを ▶ 異質な居住地域を包括する場所をつくる
- 12 つくる責任つかう責任 ▶ 持続可能な消費と生産のパターンを体験
- 13 気候変動に具体的な対策を ▶ 気候変動による影響を体験する
- 14 海の豊かさを守ろう ▶ すべてが池に流れ込むことの理解
- 15 陸の豊かさを守ろう ▶ 陸上生態系の発見と在来種保護を考える
- 16 平和と公正をすべての人に ▶ 現状の法律の問題点を共有する
- 17 パートナリシップで目標を達成しよう ▶ グローバルパートナーシップのミニモデル

「憩いの場+災害時に拠点になれる場所」という位置づけが明確になっていきました。



間近で見られる庄の本パークのハスの花

また、調整池でハスを栽培することにしたのは、小さな農地も放棄することなく活用して収益を上げる方法の一つであり、飢餓の問題の解決につながります。

そして、地域社会におけるパートナーシップのミニチュアモデルとして、特に災害時に役立つ機能を備えていることから、仲間や地域との連携を強化し、命を守るための準備を進めています。「レンコンはいざという時の非常食になるし、火の扱い方、ナタや鎌、チェーンソーの使い方、携帯トイレの体験などもできるので、非常時に生き抜く力を少しでも高められるような体験メニューをここで提供していきたい」と井上さんは考えています。

『庄の本パーク』の詳細は以下のサイトで確認できます。

<https://solar.hp.peraichi.com>